

『魔王♀陥落 ～熟牝魔王の淫語咆哮ハードファック～』

声の出演：野中みかん

シナリオ：うた

制作：にっち音声工房

・本編シナリオ

CHAPTER 1 「魔王、勇者に敗れる」

勇者が魔王を追い詰める。側近も倒され、自らの傷も深い。

息も絶え絶えな様子だが、追い詰められながらも強い意志は折れず。

…ここまで、か。

人間ごときが、まったくやりおる！

直属の精鋭に守らせたこの城を落とし、あまつさえワシにここまでの手傷を負わせるとは。

貴様との死合、久々に心が躍ったぞ。

…ふうう。 （溜め込んでいた力を吐き出すような、深いため息）

ワシの負けだ。殺せ。 （少し晴れ晴れした感じで）

そして、首でも何でも持ってゆくがいい。

もともと天下などに興味はなかった。

人間どもの迫害に耐えかねた同族たちの、その恨みつらみに絡めとられ、王などと不似合いなところに担ぎ上げられてしまったが…。

最期はこうして、ひとりの武人として死ぬること、心底うれしく思う。

だが、捕虜の扱いはくれぐれも丁重に頼む。 （口調に切実さがこもる）

ワシのような道化に付き合ってくれた者たちに、どうか情けをかけてやってくれ。

必要以上に禍根を残せば、またくだらぬ争いが起こる。それを忘れるな、人間の男。

…さあ、やれ。殺せ。 （凄みを効かせて）

貴様の全力をもって、ワシの首をはねるがいい！

…時間経過。

地下牢のような場所に監禁されて魔王。そこへ勇者がやってくる。

…貴様か。 （不信感）

ワシをこのような場所に閉じ込めて、一体どういうつもりだ。

殺すわけでも、裁きにかけるわけでもなく、他の人間どもからも隠すようにして。

もはや貴様は魔王殺しの英雄だろう？ 敗れた敵将に何の用があるというのだ。

…んな…！？ （驚き）

今、なんと言った？ ワシを、妾を迎えたいと、そう言ったのか？ 魔族の王たるワシに、人間の男の慰みものになれと？

…笑わせるな。そのような恥辱にまみれるぐらいなら、このまま死を選ぶ。

貴様も武人の端くれだろう。くだらぬことを言うな。

なんだ？ 空間投影のオーブか？

…映っておるのは、貴様の仲間と、…アレーシャ？ それにミュゼとカノンまで。 （驚き）

何なのだ、あの拘束具は。捕虜を、あのようなおぞましいものにはりつけにするなど、なんと野蛮な…。

いますぐやめさせろ！ 男どもをあやつらに近づけるな！ （怒り）

くそっ！ 何を笑っておる！ 脅しのつもりか、貴様っ！ これ以上、アレーシャたちを辱めるなら、殺す！

殺して、やる、ぞ。…ん、ぐはあつ。 （魔術を発動させようとして、途中で苦しみだす）

ん、ぐ。ワシの、力を、封じた、か…？ （苦痛に耐えながら）

く、くそっ。この、ゲスが…！

うぐ、ん、ぐふ…。

ん、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。 （苦しそうな息をゆっくり整える）

…頼む。あやつらは解放してやってくれ。 （屈辱に耐えながら）

もてあそぶのなら、ワシひとりにしろ。一度、捨てた命だ。好きにするがいい。

だが、勘違いするなよ。

たしかに命は預けるが、決して心まで許しはしない。戦の道具になるつもりもない。

それでも、捕虜の解放を約束するのなら、ワシの体、貴様にくれてやるわ。

ただし、少しでも気を抜けば、ワシは貴様を殺すぞ。 （ドスを効かせて）

せいぜい背中に気をつけるのだな。

チャプター２「手コキ→イラマチオ→フェラチオ→飲精」

チャプター１からの続き。

何？　いますぐ、スルのか？

…もちろん、あやつらは無事だろうな？　ワシが拒否できないと知って、調子に乗りおって。

このような下劣で低俗な男を英雄として拝まなくてはならない人間どもも気の毒なものだ。

なっ…。　（軽い驚き。困惑したように）

こら、待て。急に脱ぐんじゃない。前をこちらに向けるな。

あ、ああ。わかっておる。ワシは貴様に敗れた。

そして、部下たちの安全と引き替えに、貴様に体を捧げると約束した。言われなくとも、その契約は守る。

だがしかし、くそっ、これは…！　（悔しさがにじむ）

なんという屈辱！　魔族の王たるワシが、人間ごときの夜伽の相手など。

ワシの十分の一の年月も生きておらぬ若造に、よもや性処理を命じられるとはな。

…仕方がない。見せてみる。その粗末なものを。ん、だから、急に近づけるなと言っておる！

…お、おお。これが人間の男のものか…。　（思わずつぶやく。珍しいものをみたというように戸惑う）

いや、なんでもない。　（戸惑いを隠し、平静を装うように）

で？　これを、どうすればいいのだ？　手で、もてあそぶのか？

わかった。そら、触れるぞ。

思ったよりも柔らかいのだな。だらしなく垂れておるわ。

ワシに手で奉仕させるなど、魔王という肩書きも随分となめられたものだ。

それにしても、敵の総大将に急所をつかまれて、よくもまあ、そう呑気にしていられるな。

魔力を封じられたワシなど、恐れる必要はないということか。

あまり侮っておると、握りつぶしてしまうぞ。

ほれ、貴様のものがだんだんと硬くなってきたわ。

ワシの指が、心地いいのか？ 魔王と恐れられた女にもてあそばれて、感じておるのだな。

…ああ。こんなにも熱いのか、男のものは。 （吐息まじりにつぶやくように）

首をもたげて、こちらを威嚇してくるようだ…。

貴様の男根、すっかり上を向いてしまったな。

ああ、そうだ。…チンコ、だ。 （少しの羞恥心）

男の性器が、ワシの手の中で、勃起、しておる。

たった数日前まで殺し合いをしていたワシの手が、今は敵の粗チンをシゴき上げておる。

人質を取られて仕方なくとはいえ、なんとも滑稽ではないか。

人間のオスの性処理に付き合わされて、こうやって手でチンコを握らされて…。

くそつ。 これならば、斬り合いのほうがいくらかマシだ。

もっと強くシゴいてやるから、早く終わらせろ。ワシの手の中で果てるがいい！

そら、そらそらそら。 （少し自棄気味で）

…ん、おお。まだ大きくなるのか、このチンコ。 （つぶやくように）

手を動かすたびに、マラがどんどん太くなる。ビクビク脈打ち、感じておる…。

ああ、もっとだ。もっと硬く、太くしてみろ。 （少し興奮が滲みでてくる）

ほれほれ！ 限界までバキバキに勃起させてみる！

魔王の手に、剣のかわりにチンコ握らせて興奮しておるのだろうか？ 魔王の手コキで感じておるのだろうか？

ワシの悔しがる顔をみて優越感に浸るのもいいが、貴様も下半身を震わせながら随分とみっともない面をしておるぞ。

ヒトの英雄も所詮、ただのオスだな。こうやってチンコをズリズリこすられるだけで、いともたやすく間抜け面を晒す。

これではどちらが勝った側か、わからぬなあ。

…急にどうした？ カンにさわったのか？ やめろ、ワシの体に触れるな！

何をする！ 汚らしいものを顔の前に突き出すんじゃない！

貴様、ん、んぐぐ、んんん。 （口を性器で塞がれる）

んん、んぐ、んふう！ （いきなり激しくイラマチオ。口内を犯されながら、苦しそうに呻き、えづく。鼻息荒く）

あぐ、あがぁ、うん、んんん！ んぶ、ぶちゅっ、んが、んずちゅ！

ぐぬぬ、あぐ、あつぐ、んごお！ うが、あが、ずちゅる、んちゅ、ぐちゅ！

ずぼ、ずぼちゅる、ずちゅ、ぐぼお！　ずる、づづ、づぼ、ぢゅぶ、んぐ、ぐが、あつぐう！

んぶはあ！　んはあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。　（口から引き抜かれ、荒い息）

な、何を、する！　ワシの、魔王の口を、下劣な欲望で犯すとは！　（怒り）

人間の男のオス肉で、容赦なく突きおって…。女を蹂躪して、偉くなったつもりか？

なんと低俗で卑小な男か！　恥を知れ、ゲスが！

くそつ、来るな。やめろ、やめ、んぐ、ん、んんぐ！　（口を性器で塞がれる）

んん、んぐ、ぬが、ぐ、ぐふう！　んぐ、ぐちゅ、ずる、ずちゅる！　（引き続きイラマチオ。より激しく、苦しそうに）

ぐちゅ、ずぼちゅ、ずちゅ、んぐちゅ！　ず、ずちゅ、ぢゅる、んぐ、あぐ、ぐ、ぢゅずぼ！

んぐ、ぐちゅ、ずちゅ、ぢゅ、ぐ、んん、んぐ、ぐあ、んがぁ！

んぐぐ、ぐちゅ、づぢゅ、ぐ、んぐぐ、んぐ、ぐちゅ、ぢゅ、ずるちゅ、ぢゅぼ、ぢゅば、んぐぐ、んがはぁ！

んはあ！　ん、んはあ、はあ、はあ、はあ。

ぐぬぬ。くそつ！　魔王たるワシが、人間のオスにいいようにもてあそばれておる…。　（悔しさと怒り）

これが戦で敗れるということか。敗者からは尊厳すら奪い去られるというのか。

…ワシは負けん。戦に敗れたが、心までは屈服しない。どんなに責められようが、貴様に媚びたりはせぬ！

さあ、いつでも来い。好きなだけワシの口で楽しむがいい。　（冷静さを取り戻し）

その自慢のマラを、ワシの喉奥めがけてガンガン突き入れてこい。肉体の苦しみなど、貴様に許しを請うよりはマシだ。

その肉マラでどれだけ喉ピストンされようが、ワシの心は折れぬ。ワシは魔王だ。その誇りまでは奪えると思うなよ…！

簡単に屈しない魔王の姿に、心奪われる勇者。

…どうした？　来ないのか？

呆けたような顔でワシを見て。さっきまでの威勢はどこへいったのだ？

チンコをピンピンにおっ勃たせたまま、なにを間抜けな面で立ち尽くしておる。

ワシの喉を犯すのに飽きてしまったのか？

しかし、それにしても鼻息が荒いな。

何？　今度はワシから、奉仕しろ、と…？

馬鹿な。魔王に自らの意志で、人間のオスマラを舐めしゃぶれと、そう言うのか。

無理やりならばともかく、ワシがすすんでそのような破廉恥な真似をするはずがなからう。

つい先程、貴様には媚びぬと宣言したばかりではないか。

んな！ （驚き）

ワシに、惚れた、だと？ ワシの反骨心が、貴様にそう言わせた…？

き、貴様、やはり頭がわいておるな。 （平静を装うが、少し動揺する）

陵辱してもワシをおとすことが出来ないと悟って、そのような戯言を。

ワシが、それで売女のようにチンコを啜えると思ったか。

…ここで捕虜の話題を出すのか、貴様。

彼女らを守るためならば、ワシもプライドを捨ててマラ奉仕をする？

くそ。つくづく卑怯な。

…ほれ、黙って腰を突き出すがいい。 （諦めたように、平静を取り戻して）

人質を取られて、仕方なく、だ。強要されて、仕方なく口奉仕するのだからな。

んん、先程までより、太く大きく…。

ワシに啜えられるのを期待して、こんなにしておるのか。

このマラを、口と舌で舐めてしゃぶって、気持よくさせる…。

ワシが、魔王と呼ばれたワシが、浅ましくオスチンコをペロペロ舐め回すのか…。

何？ まだあるのか？

…わかった。どのみち貴様の欲望を満たさねば人質の解放はないようだ。

ワシのプライドなど、このいつとき、そこらに投げ捨てておいてやる。

ああ、言う。そう急かすな。

これから、ワシが、貴様の、チ、チンポを啜えてやる。 （屈辱とかすかな興奮で声を震わせて）

そう、チンポだ。

人間のオスの、汚らしい、肉チンポを、魔族の王たるワシが、ペロ奉仕してやると言っているのだ。

だから、もっとチンポを突き出せ。舐めやすいように貴様のオス肉を差し出すがいい。

いくぞ。舐めるぞ。憎い敵の、チンポ、チンポを。ワシが、魔王が、本当に舐めるっ。

んふ、ん、んちゅ。ちゅ、んん、んちゅ。 （男性器の先に口づけるように）

ちゅ、んちゅ、ちゅちゅ、んちゅう。

ん、ええろ。んえろ、ええろお。（舌で根本から舐め上げるように）
ええろ、えろ、んええろお。えろ、ええろえろ、んええろおお。

ふっ。腰を震わせて、みっともないな。（嘲るように）
舐め上げた瞬間、ビクンと跳ねたぞ。

んええろお、んえろ。えろお、んえろお。えええろお、えろおお。（わざとらしく声を出して舐め上げる）
えろお、えろん。えろおん、ええろおおん。えろえろ、ええろおお。
んべろ、べろ、べえろお。べろべえろ、べえろ、べろ。（湿った音を加えて）
べろお、んべえろ。んふ、んべえろ、べろ。（鼻息も荒く）
ん、べろおん、べえろおん。ん、んふ。べろべろべえろおん。
んべえろ、ん、べろ、べろべろべろべろ。べえろ、んふ、べええろおおん。

…ああ、熱い。チンポが熱いぞ。オスチンポ、どんどん硬く、上を向いてくる…。
魔王のペロ舐めが、そんなに気持ちいいのか？
ならば早く終わらせろ。早く射精して、屈辱的なチンポ奉仕を終わりにするのだ。

んぶ、ぶちゅる、ずちゅ、ちゅちゅ、ぶちゅ、ぶちゅう。（男性器を咥え始める）
ずちゅ、ぶつちゅう、ずちゅる、ちゅ、ちゅぶぶ、ちゅつちゅう。
ん、んぶう。ぶば、ん、んぶ、んんん。ん、んぶ、んふ、ん、じゅぶぶ。
んじゅ、じゅば、じゅぼ、じゅぶ。じゅ、じゅぼちゅぶ、じゅ、じゅぶ、じゅぼぼ。

んぶはあ。どうした？ もうイキそうなのではないか？
肉マラの先から、オス汁、吐き出したいのではないか？
ふっ。（嘲笑）
我慢せずに、早くイケばいい！ ワシのペロペロチンポ舐めで、だらしなく射精するがいい。

じゅる、じゅ、ちゅぶ、ん、じゅぼ。（だんだん激しく。鼻息も荒くなっていく）
じゅるる、んちゅ、んふ、ぶじゅ、じゅろろ。
ん、ん、んじゅ、じゅぼ、じゅるる。ん、んえろおん、ねろおん。（咥えたり、舐めあげたり、組み合わせて）
ええろ。れろん、えええろおん。んふ、じゅぶぶ、じゅぶ、じゅぼ、えええろおん。

ほらいケ、ほらいケ、ほらいケ、ほらいケ！（自分も興奮してきているように）

魔王のおしゃぶりで、ビュービュー、チンポ絶頂してみせろ！

ん、んふ、じゅぽ、んふ、じゅぶ、んふ、じゅるるるる。 （より激しく）

ええろ。じゅぶ、じゅ、じゅぽ。じゅぽぽ。ちゅぶ、ちゅ、じゅば。

ん、じゅ、じゅぶ、ん、ん、じゅぽ。んふ、じゅ、んちゅ、じゅる、じゅろ、じゅるる。 （汁気たっぷりで舐めしゃぶる）

んちゅ、ん、ん、じゅ、じゅぶ、じゅろ、じゅるり。じゅぶ、じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ。んは、ちゅ、ちゅる、じゅ、ん、じゅぽ。

んん、んふ。じゅ、じゅるう、じゅるじゅる、じゅば、じゅぽ、ぶじゅぽぽぽ。

じゅば、じゅぶ、じゅぶぶ、じゅばっ。じゅ、じゅるじゅ、じゅばば。じゅぽ、じゅぽぽ、じゅぽぽぽ。

じゅぶ、じゅぽじゅぽ、んっはあ。じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ！ （根本からのパキュームフェラでクライマックス）

じゅっ、じゅぽ！ んふ。じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽじゅっぽじゅっぽ！

ぶじゅ、じゅば、じゅぶぶ、ぶちゅる、ちゅば、ちゅぽぽ、ちゅぽぽぽぽぽぽぽぽ！

勇者、射精。

んん、んぶ、ぶ、んああ。ん、んぶ。んぶぶぶ。んぶはあ。 （口内で射精され少しむせる感じ）

くちやあ。 （湿った音を立てて口を開く）

んん？ ん、んふう！。 （不満そうに鼻を鳴らす）

んふ、んは。くちゅ、くちや、くちゅくちゅくちゅ。 （口を開けたまま、舌で精液を攪拌するように。息も荒く）

くちや、ぐちゅ、ちゅ、ちゅう。れろん、ええろん。んは。ぐちゅぐちゅう、ぐちょ。

へえあ、んへえ。んん、んへええええあ。 （中身を見せるように、より口を大きく開いて）

ん、んふ。こえへ、ろうら？ （「これでどうだ？」と口を開けたまま）

へ、へ、えは、えふ。へ、へ、えへ。あふ、あはあ。 （荒い吐息）

ん、んふ、ぐちゅう。 （湿った音と共にゆっくり口を閉じる）

ん、んぶ、ごく、ごく。 （喉を鳴らして精液を飲み干す）

ん、んは、んはあああ。はあ、はあ、はあ、はあ。 （息を整える）

…ん、べろり。 （口の周りを思わず舐めとる）

はあ、これで、満足か？ （さすがに少し疲れた様子で）

ワシにザーメンを味わわせるばかりか、腹の中までチンポ汁で犯しおって。

これで気は済んだか？

…ああ、人間ごときに好きにされて、まったく情けない。このような生き恥を晒すくらいならば、いっそ死んだほうがましだ…。

CHAPTER 3 「魔法のバイブ貞操帯と催淫スライムで徹底調教→アナルファック」

…ん。また、貴様か。まったく飽きもせず、毎日のように。 （呆れ）

どうも英雄どのはヒマらしい。

何だ？ また、おかしな物を持ってきたのか。どれだけ辱めを受けようと、貴様などに屈したりはせぬというのに。

勇者が詰め寄り、魔王を愛撫する。

ん、んん。断りもなく、気安く触れるな。 （声は押し殺し、鼻から漏れる程度）

んん、ん、んふ。んあ、んん。

ん？ 家畜のように牢に飼われた憐れな魔王に、自分でストリップをしろなどと相変わらずの外道ぶりだな。

脱げと言われても、もともと申し訳程度の布しかあてがわれてはおらぬ。

もはや、この程度では恥とも思わなくなってきたぞ。

…ほれ、脱いだぞ。貴様の何十倍も生きている、年増の裸だ。

ふっ、当たり前だろう。魔族を率いるため、戦に打ち勝つため、鍛錬は欠かしておらぬからな。

そこらの女のたるんだ体と一緒にするでない。

あ、ん、んふ。んあ、んああ。んは、ん、ん、んんん。

…感じてなどおらぬ。貴様の幼稚なユビ技で、ワシがヨガるとでも思ったか。

ん、んん。んぬ、ううん。む、んん、んは、う、んん。

貴様は、ん、いつも尻ばかり、だな。

馬鹿者！ そういうわけではない。 （呆れ半分、怒り半分）

他の場所も触って欲しいなどと、そのような意図はないわ。

だから、違うというのに、あ、んん、んは。

急に、乳首を引っ張るな。ん、んあ、舌で、転がすな。

ん、んふ。んは、あふん。ん、んんは。

それにしても、今日はやけに遠慮がちではないか。

いつもならば、まっ先にワシの秘所に食らいついて、自分勝手な性処理をおこなうというのに。

あのような粗末な性交では女は喜びはしないと、やっと悟ったか。ん、んん。んふ、んはあ。

貴様はたしかに強いが、まだまだ小僧だ。ワシを昇天させようなどと数百年早いわ。ん、んんふ、んは、あふん、んは。

ん？　それが今日の趣向か？　また妙なアイテムを持ち出しおって。　（呆れ）
それを、その貞操帯をワシにつけるのか。ん、やめろ。それくらい自分でつけられる。だから、やめろというのに。
…くそ。貴様はワシにどれだけの屈辱を与えれば気が済むのだ。

それにしても、これは、んん、不可思議な素材だな。金属のように見えるが、柔軟性もあって、ほのかに温かい。
んん。なんだ、尻の部分は覆われていないな。前の、女の部分だけを隠して、尻は丸見えではないか。
んん、んお。ワシの腰回りにあわせて、大きさが変わるのか。縮んで、股間にピッタリと張り付いてくる…。

むう。これは、裸よりも、むしろ羞恥心を覚える…。貴様らしい、悪趣味なシロモノだが、しかし、こんなものではワシは支配できぬぞ。
…いや、まだあるのか。次は、スライム、か。そのような低レベルの魔法生物で、ワシを、どうこうできるなど…、ん、んふ、あふ。

ん、んん。この。体に絡み付いて、気色の悪い。んあ、んふ、ん、んんん。
粘液の触れた場所が、熱を帯びたようにジンジンと火照って…。
ん、んん、んは。んん、んふ。催淫効果をもたらすように、人間どもがつくりかえたのか。貴様ら人間の、あさましい欲望の産物か。

ん、んあ、んんふ。あ、んんん。だが、こんなものでは堕ちんぞ。貴様のものにはならぬ。
憐れな人造生命の力を借りねばならぬ、貴様ごときのものにはな。
…んくっ、何をニヤついておる。だからこの程度では、ワシは…、ん、んはあぁっ！　（急な快感に思わず声が出てしまう）
なに！　貞操帯が、ワシの秘所をおおった部分が、震えておる。
ん、んは、んお。ん、あ、ああ。　（声を押し殺そうとするが、漏れでてしまう）
んん、んああ、あ、ああ。あ、あ、あはあ。

んん、んはあ！　（再度、急な快感）
今度は、スライムが、貞操帯の隙間から入って、くる。
ワシの陰部を、マンコを、粘液で濡らしながら、這いまわっておる。
ん、んああ、んお、んはあん。んお。くそ。貞操帯が邪魔で、スライムを剥がすことができぬ。
や、やめろ。振動を、スライムを止めろ。ん、んはあん。んお、あ、あおお、ん、んおお。

いかん。スライムが広がって、全身くまなく覆い尽くされる。
胸から尻からマンコから、強い刺激を与えられて、ワシの女が感じてしまう。
ああ、もう、体の火照りが、止められぬ。貞操帯からの振動も、直接クリトリスに響いて、ん、んく、んんんん！
スライムのヌルヌルだけでなく、自分の愛液でも濡れてしまっておる。こんな、こんな男の責めで、ワシが快感に喘いでしまう。

んああ、あ、あ、ああん。ん、んあっはあん。 （声を抑えきれない）

ああ、悔しい！

バラバラだった魔族をまとめあげ、傲慢な人間どもと戦いに明け暮れた日々の中で、ワシは女であることを捨てたはずだ。

王として、戦士として、ただ強く、強くあれと！

それなのに、こんな、こんなことがあっていいはずが…、ん、んあ、あはあああつ。 （またも急に強い刺激）

んぐおお、尻に、尻の中に、スライムが入ってきておる！ （以降、台詞ももっと荒い吐息まじりに）

ワシのケツ穴が、熱いドロドロに犯されておる！ 尻穴犯されながら、マンコも、クリトリスも、ブルブル震える貞操帯で感じさせられて…。

んああ、やめろ、やめてくれ。ワシをこれ以上感じさせないでくれ。

ん、ん、んっはあん。スライム、腸の中でグルグルうごめいて…。

これは、ワシの排泄物を、ウンコを食らっておるのか？

ぐ、んおお。腹の中が掃除、されていく。んぐ、おぐ、んあ、んおお。あ、あ、お、お、んおおん。

き、貴様！ そんな目でワシをみるな。浅ましく声をあげる魔王がそんなに面白いのか。

魔法の道具とモンスターに感じさせられている姿が、愉快でたまらぬか。んぐ、んほ、おつぐう。ん、あっはあ、んっはあ。

ああ、マンコも焼けるように熱い。熱い陰部をかきむしりたいのに、貞操帯が邪魔をする。

このクリ振動が、んぐっ、も、もどかしい。

んああ、指で、直接マンコ穴をズボズボしたいなどと、これは本当にワシの望みなのか？

くそっ！ ありえぬ。このようなことはありえぬ。ワシがメスの快楽を欲しておるなど、認めてはならぬ。

女性器どころか肛門まで感じまくっておるなど、あつてはならぬ。んぐぬっ、こんなことで、貴様に屈服などせぬぞお！

…ん、んん？ （急に振動、スライムの動きが止まる）

貞操帯もスライムも、急に動きを止め、た…？ んん、んお、んぐぐ、んはあ。

スライムが、んぐ、尻から、ん、んお、這い、出ておる…。ケツの中身をきれいに喰らい尽くして、出ていきおった…。

ああ、カラになった腹の中が、スライム粘液のおかげでジンジンとしびれる。

ん、んああ、熱い、熱いぞ。体の内側から溶かされるようだ。

半端にいじくられたマンコも、冷めることなく疼いたまま…。

…ぐぬう、い、いかん。ワシは何を考えておるのだ。しかし、これでは。このような状態で放置されては、いくらワシとて…。

んぐ、せ、責めはこれで終わりか？ （どこか、もっと求めるように）

こ、この程度で音を上げるワシではないわ。まだまだ耐えてみせるぞ。

どうした？ 来ないのか？ ワシの意思の強靱さに、貴様もとうとう諦めたのか…？

…な、何を言う。そのようなことがあるわけなかろう。（懸命に平静を装う）

ワシが、快楽を求めているなどと、何を馬鹿なことを！

やめろ。ワシに触れるな。（かすかに弱気になってきている？）

汗ばんで熱を帯びた肌を、その汚らしい手ででもあそぶな…、ん、あ、んああ。

んふ、んは、あっはあ。また尻か。やはり尻が好きなのだな。んん、ねちっこくワシのケツを撫で回しおって。

んぐあっ、そ、それは…。スライムにこじ開けられてヒクヒクしたままの尻穴を、んん、指でつつくんじゃない。

ん、んああ。入って、くる。貴様の指が、ケツ穴に、入ってくる。んぐ、あつぐ。んふ、んん、んおお。

まさか、貴様、ワシのケツを犯そうというのか？

スライムに腹を空っぽにさせて、今度は指で肛門の入り口を執拗にほぐして…。んお、ぐぐ、んっはあん。

おのれ、ゲスが。マンコを封印したのもこのためか。今日は後ろの穴を存分に味わおうというのだな。

ワシの、尻穴処女を、奪おうというのだな。

…んぐっ。おのれ。このワシを、魔王を獣のように四つん這いにさせるとは…。

んぐあ、んああ。この変態が！ ためらいもなく肛門に口づけおって。

んは、んぐっ、んおお。ケツ穴、ペロペロ、音を立てて舐め回すなあ。魔王のクソ穴、舌先でほじるんじゃない。

んあ、んぐ、あつぐ。んお、んん、んっはあ。

あはあ、ワシの尻が舐めほぐされておる。こんな男の舌で、ワシのケツ穴が開かれていく…。

ん、んん、んぐおおおお。（今までにない響くような低音の喘ぎ声。思わず漏れでてしまったという感じで）

んあ、んぐ、ぬぐう。熱い肉が、当たっている。ワシの尻に、オスの証が当たっている。

入れるのか？ 尻に、ねじ込むのか？ 貴様のモノを、人間のチンポを、ワシのケツ穴にぶち込むのだな。

…やってみろ。好きなだけ突くがいい。どれだけ貴様が腰を振ろうが、ワシは決して感じぬ。

貴様の粗チンでワシに快楽をもたらすことなど、到底出来ぬと教えてやる。ワシは魔王だ。人間などに負けはしない。

貴様のチンポになど、決して負けることはない！ さあ、来いっ！

んぐ、ぐぐ、ぐおおっ！（響くような低音の喘ぎ。以降も必死に抑えこもうとするが、ところどころで漏れでてしまう）

来た、チンポが来たっ！ 魔王のケツ穴処女を破って、オスチンポが入ってきたあ！

ここは尻の穴だ。快楽を得るための場所ではない。なのに、こんな！

んぐっ、違う！ 違うのっ！ （虚勢を張るが、声に快感が滲んでいる）

んぐおお、感、じぬわ。感じて、たまるものかあ。んっぐ、あ、あおおっ。

お、奥うっ。いきなり奥まで、オトコに貫かれておるっ。

魔王をおとしめるように、ガッツンガッツン、突いてきておる。

ぐぬう、んおお、ぐおお。尻の穴を、まるでマンコのようにあつかいおって。

それで、その荒々しい尻穴交尾で、ワシを征服するつもりか。

ぬぐぐ、んぐ、まだだあっ。まだ、そんなものでえっ。

そんな勢いだけのケツピストンでは、ワシは感じさせられぬぞ。

んは、んぐ、んおお。ゴリゴリ、肉棒が腸壁をえぐるう。上下左右にチンポを押し付けて、腹をかき混ぜておる。

んああ、スライム粘液で敏感になった腸内が、マンヒダのように、貴様のチンポに絡みつくう。

んっぐぐ、ああ。ワシの、意思ではない。ワシは、こんなこと、望んではおらぬ。

肛門でチンポ迎え入れて、喜んでなど、おらぬう！

すべてはスライム調教のせいだ。あのドロドロのおかげで、尻がマンコに作り変えられたのだ。

あっぐ、んお、おっぐおお。な、なんという屈辱。

魔王たるワシが、ケツマンコを犯され、こんな男のチンポに鳴かされておるなど。

ぬぐおお、くそっ！ 尻を突かれて、前も疼くうっ。

ケツからマンコに、快感が伝って、んくうっ。

ああ、濡れる。ケツ交尾で、女の涙が止まらな、いっっ。

これは、これでは。んぐぐぐ、んあ、んんんん、んぐおおっ！ （一段、快感が増す）

ここで、貞操帯を使うかあっ！ おのれ、おのれっ！

マンコとケツの快感がぶつかり合って、ダラダラといやらしいヨダレが止まらぬ。

んぐあっ、このようなはずかしめ、耐えられぬっ。殺せ。ワシを殺してくれっ。

でなければワシはっ。このままではっ。んぐおおっ、嫌だ。負けぬぞ、負けぬ。…負けたく、ないいっ！

チンポになど、負けたくないのに。人間のオスなどに、屈服させられたくないのにつ！

ワシが、魔族の王として、どれだけのものを犠牲にしてきたかっ！

望まぬ戦いを、どんな思いで続けてきたかっ！ それが、貴様にわかるのかっ？！

愛のかけらもない肛門陵辱で、女を無理矢理に自分のものにしようとする、貴様のような外道につ！

んお、ぐぬ、うっぐぐぬ。ワシは何のために、何のためにいっ！

ん、んぐおおおおおおおおっ！ （悔しさと快楽とで野太い咆哮をあげる）

あ、あ、あ、あ、お、お、お、おっ！ あぐ、んぐ、おっぐうっ！ （低く響く、獣のように吠え声が漏れでてしまう）

いかん！ これ以上はダメだ！ もう、声が、抑えられぬっ！

恥知らずに快楽を貪る、ただのメスになってしまううううっ！

ん、くっ、悔しいいいっ！ 感じるっ！ 感じてしまううううっ！

チンポでっ！ 人間のオスチンポでっ！

ケツをっ！ ケツマンコほじられてっ！ ワシの、女が、目覚めてしまううううっ！

んぐおおっ、んおおおん、ぐぬ、お、おおおん！

もう知らぬっ！ もう、勝手にしろおおおっ！

貴様の好きなように、パンパンパンパン腰を打ち付けて、チンポ肉、ズボズボ突き入れろっ！

だから、早く終わらせてくれっ！ 早く射精して、ワシを、この快楽から解放してくれえっ！

はやく、ケツに、チンポ汁を出せえええっ！

んぐあ、んっはあっ！ んおっ、お、おおう！ いくっ！ いっってしまうっ！

ぐおお、んおおん。ワシがイク前に、貴様がイケえっ！ ワシの中で、みっともなく発射してしまえっ！

ああ、いくっ！ ああ、いくっ！ 人間ごときのチンポピストンで、魔王が、ケツで、アクメするうううううっ！

あ、あおおおおう！ チンポに、ワシが負けてしまううううっ！

んおおっ！ 貴様のチンポも膨らんでっ！ 出すのか？ ザーメン、出そうなのか？

出せ出せっ！ ワシのケツに、たっぷり出せえええっ！ んおおおっ！ い、いっくうううっ！

ケツマンコに、チンポザーメン注がれて、尻穴絶頂、キメてしまううううん！

んぐ、んぐおおおっ！ 出たあっ！ 出たぞおおおっ！

ザー汁、肛門マンコに、ドップドップ吐き出しておるぞおおおっ！

んお、んぐおおおっ！ あ、あおおう、んぐあ、あおおおおう！ （これまでよりいっそう下品に吠えて）

イグウ！ イググウっ！ イグイグっ！ イつつグうううううん！

少し時間経過。

…はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。

う、ううん。く、くそ…。 （脱力し、今までのような威勢の良さはない）

貴様のようなゲスに、イカされてしまったのか、ワシは…。

結局、チンポには敵わなかった…。ワシも、ただのオンナだったということか…。

しかし、まだ、心まで折れてはいない。たとえ体は快楽に飲み込まれても、この誇りだけは、踏みにじらせはしない。

貴様には、貴様に、だけ、は…。 （気を失うように）

CHAPTER 4 「ウェディングドレス姿の魔王と淫語だらけの種付けファック→分身魔法でニ穴ファック」

あれからしばらくたって、魔王はすっかり勇者に陥落させられていた。

口では悪態をつきながら、勇者に逆らうことはできない。

ひと月ほど、勇者は魔王のもとへ訪れずにいた。（CHAPTER 3 と 4 の間に、姉妹作『淫語の女神サマ』のエピソードが挟まるという設定です）

…戻ったか。ひと月ぶり、になるか。 （しばらくかまってもらえなかったので、不機嫌そうに）

まあ、ワシとしては、貴様の顔を見ずにすんで、せいせいしておったところだ。

それにしても、貴様、以前とは比べ物にならぬほどの魔力を身にまとっておるようだが。

まさか、本当に神と契りを交わしたとでも言うのか…。

な！ 馬鹿な、誰が嫉妬など…！

貴様がどこで誰と寝ようが、ワシには関係ない。相手が神であつたとして、何の興味もない。

…んん、やめろ。馴れ馴れしく、触るんじゃない。 （虚勢を張るように。愛撫され、吐息が漏れる）

ワシは貴様の女になつたつもりはないぞ。ワシの体に、手を、這わせるな。好き放題、まさぐるなあ。

ん、んぐ、や、やめろと、言っておる。

んふ、んはあ。

き、貴様、なに、を…んぐ、んんん、んふ、んん、んふ、んちゅ。 （急に口づけられる。キス音）

ちゅっ、あふっ、んんっ、んちゅっ、んはあ、んちゅっ、んちゅう。

んちゅっ、ちゅばっ、あふっ、んちゅっ、んちゅちゅっ、ううん、あはあ。

んちゅっ、ちゅばっ、んれろお。 （舌も絡めて）

ん、んちゅ、ちゅばっ、んれろお、んちゅずずっ、んちゅるっ。 （汁気たっぷりに）

んえろ、んれろお、んふ、ええろお、ん、ずちゅ、ちゅ、んちゅうう、んれえろお。 （興奮から鼻息荒めで）

ん、んふ、んふはあ。ん、んあはあ、はあ、はあ、はあ。

…貴様。ワシをそこらの女と一緒にするな。 （少し声色がとろけ始める）

優しげな口づけぐらいで、体を、心を、許すと思うなよ。

何だ、それは？ むう。真っ白く、ヒラヒラして、どうにも動きづらそうな衣服だな。

人間どもの花嫁装束に見えるが、まさか、それをワシに着ろと？

ば、馬鹿な。 **（赤面するのを押し隠すように）**

また、くだらぬ遊びを思いつきおって…。魔王に花嫁ごっこをさせて、大恥をかかせるつもりか。

戦ばかりしてきたワシに、そのような装束が似合うはずがないだろう。

…うるさい。貴様は本当に性悪のゲス野郎だな。

ウェディングドレスを着る魔王。

…これでいいのか？ **（羞恥をにじませて）**

おのれ。笑いたければ、笑え。ぬう、くそつ。真顔でからかいおって。

長い生涯で、貴様ほどワシに恥辱を与えたものはおらぬ。いくら憎んでも憎みきれぬわ。

今度は、頭飾り、か。花嫁装束に、銀色のティアラなど、やはり、ワシを馬鹿にしておるとしか思えぬ。

しかも、何か良からぬ気配がする。まがまがしい魔力の気配が…。

んあ、勝手につけるんじゃない。あ、ああ、頭が、ぼおっとする。ワシに、何をした…？

勇者が魔王を押し倒す。

ん、んぐ、あはあ。こ、こら、急に押し倒すな。

…このまま、スルのか？

貴様がいない間、一人さびしく慰めていたおケツマンコを、そのムキムキ絶倫チンポで、ずっぱし奥まで犯し抜くのか？

…ワシは、何を言っておる…？

何？ 「狂乱の淫語ティアラ」だと？

い、いかん。頭の奥から、卑猥な言葉があふれてくる。勝手に口から飛び出しそうになる。

くそ、とれぬ。呪いがかかったように、頭に張り付いたように剥がれぬ。うう、このままでは、んぐ、うぬぬぬ…。

やめろ、今は、近づくな。オスの匂いをブンブンさせながら、ワシに近づくな。

貴様のデカマラが恋しくて、ワシの女の部分が発情してしまうではないか。

んく、おのれ、このような言葉、口にしたくないのに。だが、しかし、抗えぬ！

ああ、ウェディングドレス姿のワシに欲情しておるのだな。 （荒い吐息と共に）

もう、貴様のぶっついモノが、衣服を押し上げてきておるぞ。

花嫁魔王様の尻肉に、くっさいマラ棒を埋め込んで、ズリズリコキまくりたいのだろう？

ああ、ワシも我慢できぬ。

貴様が留守の間、ヌレヌレ敏感マンコは貞操帯にはばまれて、ワシはただひたすら、肛門オナニーを繰り返すしかなかった。

しかしそれすら、チンポ肉でズッポズッポされるのに比べればたいした快楽も得られず、ずっと苦しかったのだ。

だから、貴様のチンポ熱がワシの女をとろけさせてくれるのを心待ちにしておったのだあ。

んはあ、来るな。いや、来てくれ。もっと、オトコのチンポ臭を嗅がせてくれ。 （欲求が自制心を打ち負かしていく。葛藤をにじませて）

んおお、チンポ、お、オチンポお。オチンポ欲しいい。ぐおお、いかん、これ以上は、本当にいかん。

ん、くはあ。切ないのだ。胸が、マンコが、ケツ穴が！おあずけをくらっていたあらゆる性感帯が、今にも狂いそうなのだあ！

ん、ん、んはあ。外してもいいのか？ この忌々しい貞操帯を外してくれるのか？

ん、ああ、憎い男の手で、ワシのマンコが解放される。

んおお、濡れる。ワシのエロメスマンコ穴が、期待でビショビショになる。

んぐ、んん、んあっはあああん。オマンコの封印を解かれて、マン汁吹き出してしまうっ！ んくう、あ、あ、ああん、あっはあああん。

ん、あはあ、オマンコが丸見えだ。 （スイッチが入ったように、どんどん積極的に）

花嫁衣裳の下で、メスのエロ穴が、オマンコ汁でヌルヌルのグッチョグチョおっ。

これからカリ太デカチンポで貫かれると知って、喜びの涙を垂れ流しておる。

熱く濡れそぼったマンピラも、勃起しどおしのクリトリスも、貴様のオチンポ奉仕を待っておったのだ。

調教済みのケツマンコも、オス肉ズブプリ埋めてほしくて、ヒクヒク痙攣しておるぞ。

んああ、貴様も、脱いだ、か。 （うっとり）

オトコの、ハダカあ。チンポもすっかり勃起、しておるっ。デカくて、ぶっつい、オスのオチンポおっ。

あううん、ん、んぐおお。欲しい。それが、欲しい。ワシの穴という穴が、ズッポリ塞いで欲しくて、キュンキュンしておる。

んふう、前戯などどうでもいい。本当は貴様の姿をみた時から、いつでもハメまくれるように、ワシの体は準備万端だ。

貴様の調教のおかげで、ワシもすっかりただのメスに成り下がっておるのだ。

だから、くれ。チンポくれえ。ワシに、貴様の極太生チンポ、早く味わわせてくれえっ。

んんぐ、ぐお、んおおおお （低い喘ぎ声が漏れでる）

チンポきたあ。魔王のつゆだくオマンコに、オチンポズッポシ、ナ・マ・ハ・メえっ。
くそおっ。感じる。感じてしまううっ。チン肉ゴリゴリ、トロマン突かれて、女の幸せ、感じてしまううっ。

んはあああ、あ、ああ、ああん。（今までになく、甘い喘ぎ声で）
エロ魔王のマンヒダが、バキバキお肉棒をくわえ込んで、離さないい。
人間ごときのチンポピストンが、なぜ、こんなにも気持ちいいのだ。
んあ、あ、あ、あ、あ、ああん。ワシの、気持ちのいいところ、亀頭の先が、あ、当たるうっ。
んあ、あ、あっはああん。んぐ、ああ、ん、んんんう。
だめだっ。今まで長いこと我慢してきたメスの喜びが、ひと突きごとに押し寄せるっ。

んんっはあああっ？（喜びと戸惑い）
ワシを、孕ませる、だと？
人間の子種で、ワシが、子を宿すのか？　ワシでも、母親に、なれる、のか？
そんな、そんなことがっ。ああん、あ、あ、あ、あっはああん。
ワシらの繋がった部分から、ん、魔力が、流れ込んでくる。ワシを孕ませようと、チンポと魔力で、子宮をこじ開けようとしておる。
んああ、あはあおおおう。開くう。子宮が、開くうっ。人間の精子で子作りしたくて、子宮が下りてくるうっ。

んぐ、んっは、あっはあん。あ、あ、あ、あああん。
んはあ、オチンポ膨らむ。魔王子宮に種付けしたくて、パンパンに膨れ上がっておる。
んああ、んぐ、あ、あ、あっはあん。んは、あは、あ、あああん。
オス肉マラでかき混ぜられて、ワシのスケベ穴が、喜んでおるう。
んぐああ、あっはあああ、ん、あ、あはああん。イクう。マンコイクう。チンハメ、バコバコ、オマンコ、イックうっ！

んはああん。チンポもビクビク、限界まで勃起いっ！
出るのか？　出すんだな？　マン奥ドビュッと、チンポ汁、出すんだな？
くそおっ。　貴様などに、孕ませられるなど。生ハメ中出しで、絶頂、させられるなどおっ。
でも、もう、ダメだっ。が、我慢ができぬっ。ワシのメス子宮が、精液飲みたくて仕方がないのだあっ！
子作りしたいと、いうことをきかぬのだあっ！んぐああ、おっはああん。
イクイクイク！　アクメする！　大量スペルマジュース、子宮にめがけて、ドクドク発射あああっ！
んっはああん、ん、んぐあ、っはああん！　孕むうっ、孕ませられるうっ！
人間の子種汁で、魔王の子宮が、妊娠ぜっちよううううっ！
イグうっ！　いっつつグううううん！　んぐおっほおおおおん！（野太く吠える）

…んはあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。 （息も絶え絶えに）

んく、ザー汁、大量に中出し…。

これでは、本当に孕む。人間の子供を身ごもってしまう。んく、妊娠確実ではないか。

んぐ、んおう。 （また責められ、声をあげる）

もう、これ以上はダメだ。ダメ、なのに。今度は、下から突き上げるのか？

中出しされたばかりの、ドロドロマンコ、まだまだもてあそぶのか？

んぐおお、んっはあああん。なぜだ。なぜ貴様のチンポは萎えぬのだ。

あんなに大量のチンポザーメンを吹き出しておきながら、なぜ、まだ、こんな、ん、んあ、あ、あああん。

なん、だと？ 貴様が、ふたり、おる、だと？ （驚き）

下から、チンポ突きあげる貴様と、後ろから、ワシの胸を鷲掴みにしておる、貴様…？

同じ顔と、同じ体。ああ、同じ、お、オチンポお。

実体をもつ分身魔法、なのか。その人間離れした魔力が、そのような術を可能にしておるのだな。

んぐあ、んっはあああ。四本の腕で、ワシの敏感なところ、まさぐるんじゃないい。

マンコ突きながら、ビンビン乳首とクリチンポ、同時にコリコリいじるなあっ。んっはあ、あ、あ、あっはあああん。

んくああ、もう一本の熱いのが、背中に押し付けられておる。ああ、こちらもすでにビッキビキに腫れ上がって…。

切なそうに溢れる先走り汁を、ワシの肌に塗りこんでおるう。ああ、熱い。二本目のオチンポ、ガッチガチで燃えるように熱いい。

だが、すまぬなあ。先客がおって、まだお前をマンコに入れてやれぬのだ。だから、いましばらく、ワシの柔肌の感触で我慢しておれ。

ん、ああ、そうだ。背中に亀頭を這わせて。もっとワシのことをチンポヨダレで汚してくれ。

んはあ、背中から、尻に、尻の割れ目に、熱いの、這っておるう。

んあっ、ま、まさか。そんな、そのようなことっ。オマンコにチンポ入っておるのに、そのうえ、尻に、ケツ穴にまでっ。

やめろ、ケツマンコにオチンポ突っ込むな。二本のチンポで、ワシを狂わせるなあああっ。

んぐ、ぬぐぐ、んお、んっほおおっ。 （低音の響くような喘ぎ。後半にかけてどんどんエスカレートしていく）

魔王アヌスに、二本目チンポが、入ってくるうっ。んぐおおっ、んお、お、おっほおおっ。

マンコと、ケツ穴、両方チンポで犯されておるうっ。

魔王たるワシが、人間のオス肉、二本ハメられ、んぐお、おおっ、おおっほおおっ！

なんということだっ。ワシが、恥知らずにも花嫁衣裳なんぞ着せられ、ふた穴セックスでよがっておるなどおっ。

んぐおっほおっ！

マンコは中出しザーメンでグチョグチョにかき混ぜられ、ケツは肛門がめくれあがるほどにほじくり返され、これは、凄まじいまでの、カ・イ・カ・ン、んおおおっ！

イグイグう。こんなもの、すぐに気をやってしまうっ！ オマンコもケツも、すぐに、イググうううっ！ んぐあっはあああん！

んぐお、ああお、おおう、お、おおう。 （すっかり蕩けた喘ぎ声）

あ、あ、あ、お、おおん、お、お、おおん。あっぐう、おっぐう、あ、あ、あへえっ。

あひ、あふ、あへ、あっへえええっ。

スゴイ、スゴイぞ。これ、スッゴいいいいん。

マンコセックスも、ケツセックスも、どっちもすつごく、気ん持ちいいぞおおおっ！

ああ、もう、わけがわからん！ ふたつの穴に、二本のチンポっ。ズリズリズボズボ、交互に抜き差しっ！

お、お、お、オオオウ！ オッホオオオウ！

んぐお、これがワシの声なのか？ この、ケダモノのように吠える声が？

ん、んほ。ん、んおおおおおおう。

…馬鹿な。こんな下品なアへ声、ワシが出しておるのかっ。

んぐ、ん、んんん、ん、ンッホオオオオオッ！

んぐああ、抑えられぬ。マンコアナル同時ファックで、変態魔王が、吠えまくりいいいっ！

んぐ、あぐ、んっぐ、オ、オオオオウ。気持ちイイっ！ 二本の絶倫チンポ、ギモヂイイいいいいん！

またイクまたイクまたイククウウっ！ んぐ、んん、ンッホオオオオオン！

もっと。もっただ。もっと、チンポで、突きまくれえ。ア、ア、ア、ア、オ、オ、オ、オ、オッ、オオオオオン。

それだ。それイイ。それ、イイ、ぞおっ！ ズッコンパッコン！ ズッコンパッコン！ ズッコンパッコンズッコンパッコンうううっ！

ワシも、自分から腰を振ってしまううっ。魔王が、オチンポ欲しくて、ケツ振りまくりいいいっ！ んんん、んぐおおおおっ。

んぐぐ、わ、ワシの顔が、どうした？ んん、そ、それは、そうだろう。こんなに激しい、ふた穴交尾をかましておるのだ。

みっともない、チンポ顔になるのは、当然だろう。んぐ、んあっは、あっひい、あへっ、んあ、ア、アッヘエエツ。

ど、どうだ？ ワシのアへ顔は？ 貴様好みのだ変態スケベ顔になっておるかあ？

んっふふふ。んん、あっはっはっはっはあっ！ （快楽に染まる、少し狂気じみた笑い声。プライドも何もかも捨て去ったかのように）

知らなかったぞ。セックスがこんなにイイものだったとはっ。

これは、この快楽は、すべての苦悩を忘れさせてくれる。もう、戦の行方などに心を悩ませなくてもいい。

ワシにはもう、チンポとマンコさえあれば、それでいいっ。

だから、ほれ、貴様のそのブツとくてガッチガチの勃起チンポで、もへっと、ワシを犯しぬけっ！

ワシに、本当のエロメスアクメを教えてみせろ、ングオオオオッ！

んぐ、あつぐ、お、お、ンホ、オッホオ。んお、ングッ、ンッオオオオウッ！ （絶頂に向けてさらに下品に野太く）

ングオオオ。ケツもマンコもギモヂイっ。貴様のチンボも、最高だぞおっ。

今は、今だけはっ。ワシは、貴様のドスケベ花嫁だあっ！

ド淫乱魔王のメス穴すべて、貴様のチンボ専用肉便器にさせてやるうっ！

だから、出せえっ！ マンハメチンボとアナルハメチンボで、同時にザー汁、ビュルビュル排泄うっ！

ワシの便所穴を、白いドロドロで満たしてくれえええっ！

んぐおお、これは、これはスゴイっ！ スゴイ絶頂、そこまで来てるぞおっ！

んぐお、んほ、ンッホホオオオウ。ウッホオ、イグイグ！ また、イググウウウン！

ア、ア、ア、ア、オ、オ、オ、オ、オググ、オオッホオオオオオオン！

ソラソラソラソラっ！ 貴様もイケっ！

ズコズコバコバコ高速ピストンで、デカマラ肉棒から、子種汁ドッピュドピュうううっ！

濃ゆういチンボ汁射精で、マンコとアナル、種付け同時ぜっちよおおおおうっ！

ンッホホホオオオウ！ 出ておる出ておるっ！

二本のチンボから、ドクドク、中出しっ、中出しいっ！

マンコ子宮もっ！ 直腸子宮もっ！ 大量特濃ザーメンで、妊娠確実のドスケベアクメえええっ！ んぐ、んん、ンッホオオオウッ！

アアア、アアッ、オオオオオオオオン！ （以下、これまでで一番下品に。声を荒げて、濁点がつくような発音で）

ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、ングオオオオウ！ ンオオオオオオウ！ ンンオオオオオオオオウ！

イググウウウ！ イグイグ！ インググウウウウッ！ ングア、ンア、アアアアアオオオオオオオオオオオオウ。

イ、インググウウウウウウウウウウオオオオオオオオンッ！

少し時間経過。まだ息は整い切れていない。

…はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ…。

…ずいぶんと乱れてしまったが、あれがワシの本心だと思うなよ。 （少しやわらかくなった？）

ワシは、誇り高き魔族の王だ。次は、こうはいかぬ。

…くっ。ニヤついた顔で見るんじゃない。いつまでもいけ好かない男だな。

…うるさい。貴様の子種でワシが孕むわけがなからう。あつてたまるか。

だが、もし、そのようなことになれば、…わかっておるだろうな？

…ん、もう行くのか？ 都合の悪い話になるとこれだ。まったく男というものは。

何故、ワシはこのような男に敗れたのだろうか。それだけがどうにも解せぬ。 ～終わり～